

生命機能研究科国際サマースクールと国際交流



海外交流

大澤 五住*

International Summer Schools and Exchanges at the Graduate School
of Frontier Biosciences

1. はじめに

生命機能研究科では設立当初から研究科の国際化を主要な目標に据えてきました。外国人が当研究科の大学院生となるための応募を容易にするため、2004年度入学試験(2003年夏実施)からGRE(Graduate Record Examinations)とTOEFL(Test of English as a Foreign Language)により、受験のためにわざわざ来日する必要を無くした選抜を実施しています。こうした大学院生獲得のため制度とは別に、21世紀COE(Center of Excellence)プログラム「生体システムのダイナミクス」(平成14~18年度)およびグローバルCOEプログラム「高次生命機能システムのダイナミクス」(平成19年度~)の支援を受け、平成14年度より様々な国際化を目指したプログラムを展開しています。外国人招聘講師によるセミナーの開催、国際共同研究活性化のための短期招聘、大学院生や研究員の国際学会や短期コースへの派遣、さらに1年以内の短期留学支援などを随時行っています。さらに、これまでに隔年で3回の国際サマースクールを実施してきました。以下に、サマースクールを中心に、これらの国際的活動を紹介します。

2. 国際サマースクール

国際サマースクールは2004、2006、2008年の7

月に開催されました。参加者はホームページ、メールや郵送したポスター等により公募しました。メールを含めて、何らかの形で研究科に過去にコンタクトがあった外国の学生や研究者にサマースクール参加者募集の周知をお願いしました。申請書、指導教員や上司の推薦書などの提出された書類に基づいた審査により、学年や研究経験、さらに国別の人数のバランスも考慮して、参加者の選考をおこないました。その結果、各回20~25人の学生を招聘し、これまでに、3回の国際サマースクール参加者を合わせると、のべ65人の外国からの学生が生命機能研究科に滞在しました。参加学生の出身国はオーストラリア、バングラデシュ、中国、台湾、フィリピン、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、パキスタン、シンガポール、タイ、米国、英国、カナダ、ドイツ、ロシア、スロバキア、メキシコ、イラン、ポーランド、ルーマニア、レバノン、アルゼンチン、ニュージーランド、トルコと26カ国に及んでいます。いわゆる先進国の学生は少数派で、(残念ながら)アフリカを除く全ての大陸からの学生が参加し国際



* Izumi OHZAWA

1955年11月生
カリフォルニア大学バークレー校
Department of Physiological Optics, 1986
現在、大阪大学 大学院生命機能研究科
脳神経工学講座 教授 Ph.D. 視覚神経
科学
TEL : 06-6850-6520
FAX : 06-6850-6522
E-mail : ohzawa@fbs.osaka-u.ac.jp



2008年国際サマースクールの講義(神経科学コース)を受ける参加学生たち

色豊かな環境を作る事ができました。これらの外国からの学生に加えて、ほぼ同数の生命機能研究科所属の学生がサマースクール講義を受講しました。

回によって多少の違いはありますが、第1週は生命機能研究科と関係研究科の講師陣による講義、それ以後は研究室に少人数で分散して、研究を実際に体験するというスケジュールで実施されました。



研究室で実験をする外国人学生

講義に関しては、2004年の第1回サマースクールでは、参加者全員が同一の講義を受けました。第2、3回サマースクールでは、第1回スクールの学生の「専門外の内容が難しかった」等のコメントに基づいて、講義をコースに分けて提供することにしました。初日は研究科の研究内容を概観する講義を行いましたが、2日目からは 分子・細胞生物学、ナノバイオロジー、神経科学の3コースに分かれて、ある程度専門性を持たせた講義内容にしました。

また、単に講師陣による講義だけでなく、外国からと大阪大学からの参加者全員が研究発表を行いました。阪大生にとっては、初めての英語による研究発表となったケースも多く、必ずしもスムーズにはいかなかった発表もありましたが、貴重な経験になりました。

3. 学生主体の国際合宿

グローバルCOEプログラムの一環として、学生が主体となり計画運営する合宿(リトリート)をこれまでに3回行っています。学生の自主性とリーダーシップを引き出すため、学生たちが直接依頼し外部

から招待した先生方を除いて、生命機能研究科の教授および准教授は参加しない形式で行いました。研究科からは、学生および、ポスドク、助教までが参加することができます。2009年夏に神戸の六甲山で行った合宿には、外国からの学生とポスドクが12人招待され、3日間の集中的な討論と発表を英語で行いました。このように学生たちが密に、夜遅くまで討論を行う環境におかれる事で、言語の壁も低くなり打ち解けることができました。合宿でのこうした経験を経て、山を下り研究室に戻ったときには、実験やセミナーにおける意思の疎通が格段に向上したというコメントが、外国人学生からも阪大生からも多くあり、非常に好評でした。討論や発表の内容も、生命機能研究科の理念である異分野融合研究を中心にグループを変えながら、どのような融合研究が可能か、またやりたいかについて活発な議論がなされたようです。

こうした合宿の経験を生かし、2010年夏には、さらに多くの外国からの学生の参加を募り、サマースクールと合宿を一体化させた形で実施することを計画しています。合宿は毎年行っており、合宿を立案・実施する学生たちの経験度も高まってきており、かつそれが年ごとに向上しながら先輩から後輩に引き継がれています。このような合宿により、外国の研究室や研究科とも年を超えてある程度永続的な国際協力関係を構築する事を目標にしています。

4. 学生・ポスドクとして再来日する外国人学生

過去3回の国際サマースクール参加学生の中には、大学院生として生命機能研究科に入学する学生が増えてきました。2004年サマースクールに参加したパキスタンからの参加者は、生命機能研究科5年一貫制博士課程の3年次に編入(博士後期課程に相当)し、既に博士号を取得し活躍しています。また、2006年サマースクールに参加したロシアからの学生は、国費留学生として生命機能研究科に入学しました。その他にも、再びグローバルCOEプログラムの短期留学あるいは研究者招聘制度を利用して、来阪し研究をしながら大学院入学を目指している方、あるいは特任研究員として研究に従事している方がいます。

GREとTOEFLを利用した入試制度だけでは、外国の学生にとっても、彼らを受け入れる我々にとっ

ても、言語、文化、慣習の違いを超えて、お互いの能力と大学の研究環境を十分に知る事は困難を極めます。Skype等のビデオ付きのインタビューが可能になった現在でも、実際に時間をかけて会い、お互いを知る事は欠かせないと思います。上に挙げた例では、サマースクールや合宿で一度、十分な時間を使って相互理解ができたことが、再来日し生命機能研究科に正規の学生あるいはスタッフとして参加することを可能にしたと言う事ができるでしょう。

5. おわりに

大学の国際化に関して、留学生を迎えるための

Global 30 (G30)等、制度面、資金面でのサポートが充実してきつつあることは、大変喜ばしいことです。ただ、このような制度を多くの外国人学生に利用してもらうためには、大阪大学をまずよく知ってもらうことが重要です。外国の学生個人個人が大阪大学を視野に入れ、入学を検討するところまで持ってくるためにも、国際サマースクールや国際合宿の様な短期プログラムは、非常に有効であると考えています。

